

「社会」の学とアクター・ネットワーク理論  
— モナドロジーとモノの理論 —

三 上 剛 史

Actor-network theory and sociological theories  
— Durkheim, Tarde, Beck and Luhmann —

Takeshi MIKAMI

# 「社会」の学とアクター・ネットワーク理論 — モナドロジーとモノの理論 —

三 上 剛 史

Actor-network theory and sociological theories  
— Durkheim, Tarde, Beck and Luhmann —

Takeshi MIKAMI

## 要 約

B・ラトゥールらが主唱する「アクター・ネットワーク理論」の理論的意義を、社会学の理論体系の中に改めて位置づけることが本稿の目的である。アクター・ネットワーク理論の内容については既によく知られているので、その詳細を解説することが目的ではない。言うまでもなく、科学論や人類学を中心とした分野でのアクター・ネットワーク理論の有用性は承認できるが、社会学理論としての理論的吟味と可能性についての検討は、必ずしもきちんとなされている訳ではない。

ラトゥール自身は社会科学、とりわけ社会学を批判することにエネルギーを注いでいる。彼の社会学批判自体は決して誤っている訳ではないが、社会学の理論史を踏まえて検討するならば、理論的に不十分な点や、他の社会学理論との差異が不十分な点などが見受けられる。

アクター・ネットワーク理論がより理論的に充実したものになるためにも、また現実への応用可能性がより高められるためにも、社会学の理論体系と学説史を踏まえたうえで、現代社会学理論の一つとして、その理論内容を吟味しておく必要がある。

アクター・ネットワーク理論が多くの成果をあげていることは事実であり、それゆえに、この理論的志向性それ自体は今後もその成長が見込まれるものである。だからこそ余計に、その理論的根拠が、より一般的な社会学理論研究の俎上にあげられねばならず、他の諸理論との類似性・共通性ならびにANTの独自性が理論的に検証される必要がある。

キーワード：ANT、Latour、モナドロジー、準客体

## はじめに

本稿の目的は、B・ラトゥールらが主唱する「アクター・ネットワーク理論」を社会学の中に改めて位置づけることにある。『科学が作られているとき』の出版は1987年に遡るが、その後『虚構の「近代」』（1991）や『科学論の实在』（1999）、『社会的なものの再構成』（2005）などの著作が続いて刊行され、科学論以外の分野にも影響を与え続けている。

その内容については既によく知られているので、ここでその詳細を解説することが目的ではない。もちろん科学論を中心とした分野でのアクター・ネットワーク理論の有用性は承認できるが、社会学理論としての理論的吟味と可能性についての検討は、必ずしもきちんと成されている訳ではない。

ラトゥール自身は社会科学、とりわけ社会学を批判することにエネルギーを注いでいる。アクター・ネットワーク理論を研究・応用する研究者達もラトゥールの社会学批判に追随している。そこでの既存の社会学（近代社会学の理論的主脈）への批判自体は、決して誤っている訳ではないが、社会学の理論史を踏まえて検討するならば、理論的に不十分な点や、他の社会理論との差異が不分明な点などが見受けられる。

アクター・ネットワーク理論がより理論的に充実したものになるためにも、また現実への応用可能性がより高められるためにも、社会学の理論体系と学説史を踏まえたうえで、現代社会学理論の一つとして、その理論内容を吟味しておく必要がある。

### 1 アクター・ネットワーク理論の論点

アクター・ネットワーク理論の中心的論点は例えばJ・ローが次のようにまとめている。アクター・ネットワーク理論（以下、ANTと略記）の核心は「“異質性のネットワーク”というメタファーであり、…それは、社会・諸組織・諸主体（agents）そして機械など全てが、多様な素材（単に人間だけではなく）のパターン化されたネットワークの帰結である」と考えることにある（Law, 1992, p.380）。

それゆえに「社会的なもの」（the social）とは「異質な素材のパターン化されたネットワーク以外の何物でもない」とされるのであるが、ラトゥール自身の言葉を用いれば、ANTにおいては「まず、社会も社会的なものも存在しない。それらは、非社会的な諸素材の結合における、微妙な変化の内に辿られねばならないものである」（Latour, 2005, p.36）。

にもかかわらず、これまで社会学は「社会的なもの」を同質的な集合体（aggregate）と考えてきた。だがそうではなく、その集合体は「経済・言語・心理・法・経営などによって作り出される協同から説明されるべきなのである」（ibid.,p.5）。ANTとは、人間とモノの両方を含めた様々な要素の協同体（association, collective）としてのネットワーク分析から始めようとする理

論であり、異質的諸要素の協同関係の“痕跡”として「社会的なもの」を捉え直そうとするものである。

ここで批判されている「社会学者」達は、E・デュルケームを始祖とする近代社会学の主脈であり（いささか大雑把に過ぎるが）、「社会学」においては社会があたかも実体であるかのように想定されていて、社会によって他の全ての要素を説明しようとしていると批判される。この「社会学批判」は多分に一面的でありまた不正確であるとも言えるが、いわゆる「ポストモダン」の社会学理論が批判してきた「近代社会学批判」と軌を一にするものであり、その指摘自体は間違っていない—批判を近代社会学一般に拡大するのはややバランスを欠いているが、既存理論の批判から出発することで自説の新しさを示すという点では、理解はできる。実際、U・ベックのような現代社会学の理論家も、“近代”社会学批判において同様の手法を採用している。

ANTによってラトゥールらが多くの成果をあげていることは事実であり、それゆえに、この理論的志向性それ自体は今後もその成長が見込まれるものである。ただ、だからこそ、その理論的根拠が、より一般的な社会学理論研究の俎上にあげられねばならず、他の諸理論との類似性・共通性ならびにANTの独自性を理論的に検証しておく必要がある。

ANTに対しては既によく知られた批判が存在するが、ここではその一つ一つを吟味する作業は避けたい。むしろ、数多くの批判が存在することを踏まえたうえで、それでもANTの理論的メリットとして残るのが何であり、それが社会学史上で持つ意義は何かという点に論点を絞りたい。

ANTへの批判の要点と科学論上の位置づけについては、〔松本、2009〕に簡潔に要約されているのでそちらに譲るが、ANTの形式上の利点が「つまるところ、万物が万物にかかわるといった説明とさして選ぶところがないという認識利得の乏しさと引き換えに得られている」（松本、2009、164頁）という印象は正しいであろう。

実験室や研究室についての分厚い記述を提供しているという利点がある反面、ネットワークの叙述に終始し、その記述の理論的妥当性を検証するという点では物足りないものとなっているのは確かである。ただ、本稿で追究したいのは、それにもかかわらずANTが持っている社会学的な時代精神の発現であり、また古典的社会学以来、連綿と引き継がれてきた問題意識の現代的発露である。ここではそれを「社会」の概念と、「モノドロジー的世界観」の二点に絞って検討したいと思う。

## 2 「ポストモダン」あるいは「ポスト・ポストモダン」の社会学理論として

ANTは多くの点でいわゆる「ポストモダン」的 sociology 理論の特性を備えている。〈実体〉の概念を変更すること、〈主体／客体〉の二分法を避けること、前もって存在する〈因果性〉の想定を

批判すること、境界設定より〈差異化〉を重視すること等々である。

ラトゥールの発言を幾つか拾ってみよう。「実体 (substance) は、その上に何が築かれても変わらずにある岩盤というよりも、むしろ、真珠をネックレスにまとめあげている糸に近いものである」(Latour, 1999, p.151)。「因果性は事象の後に続くのであり、それに先立つ訳ではない」(ibid.,p.152)。「科学研究にとって、境界区分 (demarcation) は差異化 (differenciation) の敵である」(ibid.,p.157)。そして「科学研究は、自然を説明するために社会を用いることや、逆に、社会を説明するために自然を用いることを控えるべきである」と言う (ibid.,p.152)。

これらの主張が(最後の“自然と社会の関係”を述べたものを除けば)、一般にポストモダンの理論群に共通するものであることは、今更改めて説明するまでもないだろう。J・デリダらの「脱構築」を始めとして、近代的意味での「実体」や「主体」を否定し、絶えざる「差異化」として現実を(あるいはテキストを)見たのが、近代批判のポストモダンの思想群であった。

但し、ANTは「ポストモダン理論とは異なる」。ラトゥールによればANTは、“大きな物語”や“西欧中心主義”などを批判するポストモダン主義と「混同されてきたが、それはミスリーディングな見方である。……脱構築は、達成されるべきゴールではなく、克服されるべきものなのである。より大切なのは、社会的なものを集め再結合する新しい制度・過程そして概念が何なのかをチェックすることである」(Latour, 2005, p.11)。

これはポストモダン期を経て、1990年代以降に新たな社会理論を構築しようとする理論的潮流に沿った姿勢であり、「ポスト・ポストモダン」を志向する人文・社会科学の諸理論が共通して保持する理論的特性である。行き過ぎた「脱構築」や、他方での「構築主義」の過剰など、差異化を強調するあまりの理論化不能症とでも言うべき状況から脱しようとする試みである<sup>(1)</sup>。

- (1) 近年になって台頭しつつある「新実在論」的理論構築はそのような試みと見ることができる。例えば M・ガブリエルの『なぜ世界は存在しないのか』(Gabriel, 2013) という耳目を引くタイトルを冠した書物も、ポスト構造主義と構築主義の双方への批判から出発するものである。

ANTの場合は、具体的な実験室や研究室の場面において、どのようにネットワークが形成され、そこでどのような協同が成されているかを丹念に辿ることで、近代的前提に束縛されない新たな現実把握の方法を提示しようとしている。それに対して批判があることについては既に触れたが、それはそれとして、ここでは「社会」の概念に拘ってみたい。

ANTの主張には、ポストモダンの理論として、あるいはポスト・ポストモダンの理論として、その理論的発想にどのくらい独創的視点が存在するかについては、意見の分かれるところであろう。

しかし、社会と自然との関わりから出てくる「社会」批判と社会学批判には、目を止めざるを

得ない。現代社会学においては、「社会」を“コミュニケーションのネットワーク”と捉える姿勢が一般化しつつあるが、ANTがネットワークを強調しつつも、「社会」をネットワークとは別のものとして否定せねばならないのはどうしてか。この点が気に懸る。

### 3 「社会」批判

「社会」の概念を批判する動きは、いわゆる「社会の終焉論」として、1990年前後から幅広く論じられてきた。20世紀末以降の、情報化されたグローバル化しつつある社会においては、近代社会において想起されていたのと同じような仕方「社会」を想起することは、日増しに困難になりつつある。

「“社会”を一つの主導概念や基本単位で表すことはできない、……もしできることならば、私は“社会”という概念を完全に廃棄してしまいたい」(Man, 1986, p.2)と研究者自身が述べたし、それが社会学自身の「アイデンティティ・クライシス」ともなっている(Rose, 1996, pp.327ff.)。ラトゥールの「社会」批判は、これと同じ社会概念への不信を、近代の終焉と結びつけて科学論として展開することにある。

「一つの歴史的時代が終焉を迎えつつある今日」(Latour, 1991, p.21)、我々は「“社会”は協同体の一部に過ぎず、社会学者によって創案された分割の片側しか示していない」(Latour, 1993, p.4) ことを知るべきであると言う。

ここでの「社会」批判は、それまでの科学論における“SSK”(科学的知識の社会学)との関わりにおいて考えなければならない。よく知られているように、SSKは科学知を社会との関係性において検討しようとした科学論であり、そこでは社会の影響力が強調されることになる。

ラトゥールから見れば、そこで言われている「社会」とは、近代人が二分法によって作り出したものであり、実際の科学的営みを解明するには凡そ相応しからざる理論的夾雑物である。SSKのように社会を“実体”的に想定するのではなく、アクターが他のアクターと要素を認識し、互いの関係を位置づけるメカニズム(「翻訳」traductionと呼ばれる)を記述するのがANTである。

ラトゥールによれば、近代人は一方に自然(自然・客体・非人間)、他方に社会(社会・主体・人間)を設定し、両者を都合よく説明の原理として使用してきたのであるが、自然から説明したり社会から説明したりすることで、実際の科学的実践(「協同体」)は覆い隠されてしまっていた<sup>(2)</sup>。“社会・主体・人間”対“自然・客体・非人間”という言葉の使い分けについては、その厳密性に若干の疑問が残らない訳ではないが、ここでは「社会」の概念に絞って、ラトゥールの「社会」批判の内実を吟味したい。

- (2) この点についてのラトゥールの説明は必ずしも明晰とは言えないが（人間と非人間、社会と自然の境界がどこにあるのかが、必ずしも明確でなく、読み手はやや混乱する）が、その主張を要約するならば以下のようにまとめられる。

社会科学者達は、一方では神々・貨幣・ファッション・芸術などのモノは、社会がその社会的必要や関心を投影するスクリーンに過ぎないと告発しつつ、他方では、人間は客観的力によって操られる人形に過ぎず、モノは人間社会を形成するほどに強力な存在であると主張しており、視点が二重化していると言う（Latour, 1993, p.52f.）。

ここで批判されている「社会」とは何を指すのであろうか。ラトゥールに従って（単純化して）捉えるならば、彼が批判する「社会」とは、デュルケームに由来する社会学的な社会概念である。第1節で既に指摘したように、デュルケームに由来しその後の20世紀社会学の主導的概念となった社会の概念が批判の対象となっている。

もちろん社会学の学説には社会の概念を振り回すことを好まない学派があるし、M・ウェーバーのような巨匠でも、社会概念の使用には慎重であった。とはいえ、デュルケーム的社会概念が社会学の主流であったことは確かであり、デュルケーム以降の20世紀社会学を代表したT・パソンズにおいても、社会の概念は堅持され、これに「構造」「システム」などの新たな概念が付加されて行った。

だがラトゥールは「システム概念よりも柔軟で、構造よりも歴史的（historique）で、複雑性よりも経験的である」ネットワークという概念に依拠しようとする（Latour, 1991, p.10）。構造もシステムも社会概念の変種であり、「複雑性」はN・ルーマンなどがシステム理論の更新を企図して導入した概念である。

改めて述べるまでもないことだが、デュルケームの方法論的集団主義は（ウェーバーの方法論的個人主義とは反対に）社会と個人の関係を示す際に、個人を超えた社会の実在性と拘束性に注目するものである。社会と個人が別ものであるがゆえに、何らかの媒介概念を用いてその二つを結びつけることが初期社会学の、そして近代産業社会（並びに国民国家）の課題であった。

デュルケームは共同体、連帯、規範、道徳、宗教などの要素に注目したがゆえに、あたかも社会が個人を完全に包み込んで支配し、全てが社会から説明されるかのような誤解を生んだきらいはある。

ラトゥールの「社会」批判もそのような一般的理解の上にあるが、ここで彼が特にデュルケーム社会学を批判する背景には、後述するようなG・タルドの「モノドロジー」がある。ANTによる「社会」批判、「社会学批判」の根底には、デュルケームの理論的敵対者であり、またデュルケームに“敗れた”かのような位置づけに甘んじてきたタルド理論へのシンパシーがある。この点をきちんと整理しておかなければ、なぜ「社会」が“あたかも実在物であるかのように社会学者がこしらえたもの”として否定的に捉えられなければならないのかが理解されない。ラトゥールとモノドロジーについては後節で詳しく検討するが、その前に、少し回り道にはなるが、次節

では、ベックの「社会」批判を媒介とすることで、ANTの理論的特性を際立たせておきたい。

#### 4 U・ベックの再帰的近代化論とANT

##### (1) 社会の概念

いわゆるポストモダンの社会理論と自らを区別したうえで、これまでの社会概念を批判し、併せて近代社会学全般を乗り越えようとする点で、ベックの再帰的近代化論にはANTと通底するものがある。

ベックの言う「再帰的」(reflexive)近代というのは、近代が一本調子の発展的上昇を終えたことを表わす概念である。近代社会は、近代が生み出した制度や科学技術の影響を“再帰的”に自分自身に再び降りかかってくるものとして体験することになったとする。再帰的近代はまた「第二の近代」とも呼ばれるが、そこでは常に自らを反省的にモニターし、自己点検と自己編集を繰り返し、自己を創造してゆかねばならない<sup>(3)</sup>。

- (3) 再帰的近代という用語は、事実としての制度的な再帰性（近代自身が近代の限界を生む）という客観的側面と、そこに生きる人間個人や集団が、自らの態度を反照的に再構築し、不断に自己をモニターしつつ再帰的に生きる必要が生まれているという、主観的な側面との両方を持っている。ベックは様々な場面で再帰的近代について論じているが、ここではA・ギデンズ、S・ラッシュとの共著『再帰的近代化』(Beck et al.1994)のみをあげておく。

ベックの再帰的近代化論とANTとを比較した論考として、ラトゥールには「再-近代化は生じているのか？」(Latour, 2003)がある。近代を再考するというベックの姿勢自体には一定のシンパシーを示しているように見えるが、結論的にはベックの主唱する再帰的近代化論とANTは異なるという結論に至っている。

異同の要点は「近代」の捉え方と、“再帰的近代化”か“再-近代化”かという視点の違い、並びにそこで前提とされている「社会」に対する考え方の違いにある。

『虚構の「近代」』(Latour, 1991)などでも唱えているように、ラトゥールは、我々は未だかつて本当の意味での近代人であったことはないと考えている。科学論について言えば、近代における説明の仕方は、実際に起こっている（近代的な）科学的営為を、主体（人間・社会）と客体（非人間・自然）に二分し、そのつど社会（人間）からモノ（非人間）を説明したり、あるいはその逆の論法を用いたりして、実際のプロセスをきちんと説明してこなかったと言う。

そういう意味で、近代はそこで起こっていることを正しくは説明・解釈してこなかったので、「我々が近代的であったことはない。……近代の自分自身に対する解釈が、その行為を適切に描写していたことなどなく」、近代の自己表象と実践との間には食い違いが存在していた(Latour,

2003, p.38)。

それゆに、ラトゥールはそもそも「我々は近代的であったことなどない」と言うのである。ベックは近代から第二の近代への移行を問題にするが、科学研究においては、重要なのは再帰的近代化ではなく、きちんと近代を遂行すること＝再－近代化 (re-modernization) である。その方法がANTだと言う訳であるが、この表面的な結論よりも、むしろここではベックの「社会」観とラトゥールとの相違に注目しておきたい。

ラトゥールは、ベックは社会現象には実質 (substance) があると見ており、その特性が第一の近代とは異なったものに変化していると考えていると批判する。ANTは社会の実体性のようなものは否定する。ベックがそういう見方をするのは「デュルケーム、ウェーバー、ブルデューらによって占められていた、神の眼の視点 (God's-eye) の特権的地位に自らを固く据えることをためらわない」からである (ibid.,p.40)。

社会はデュルケームが言ったような形で「一種独特の実体として存在するのではなく、ローカルに達成されるべきものである」。にもかかわらずデュルケームと同じように「ベックはそこに社会があると信じている」(ibid.,p.41)。この点は、ANTによる社会批判の延長線上にあり、当然に導かれる結論であろう。

ラトゥールの「社会」批判それ自体の是非は保留するとしても、ベックが“デュルケーム的な「神の視点」に立っているように見える”という主張は理解できない訳ではない。ベックは第二の近代の到来に当たって、旧来のデュルケーム的な実体的社会モデルから離脱すべきだと説いているが、その主張とは裏腹に、実際にはデュルケーム的なモデルに柔軟性を持たせて第二の近代に当てはめた、ゆるやかな〈デュルケーム＝パーソンズ〉モデルに立っているように思える。

ベックの再帰的近代化論や個人化論の全体的構図は、〈デュルケーム＝パーソンズ〉図式からの離脱と見えるし、ベック理論の一般的読者もそのように捉えているはずである。だが、「ポスト社会的」社会概念と「個人化論」との関係づけは、その図式に収まりそうもない。晩年のベックの理論は次第に〈デュルケーム＝パーソンズ〉図式に回帰しつつあったのではないか。

個人化する個人の“自己編集能力”は「コスモポリタニズム」(Kosmopolitismus) という規範性を前提としているようである。ベックは、デュルケームが「個人主義と知識人」(1898) で強調した「人間性の宗教」(religion de l'humanité) に依拠しながら人間性への普遍的信頼と合意を基盤とし、個人と社会をコスモポリタニズムで架橋しようとしているように思われる。「人間性の宗教」のような、誰もが人間として備えている (と考えられている) 性質によって社会性を担保しようとするならば、それは規範性を緩めた〈デュルケーム＝パーソンズ〉モデルと類似したものにならざるを得ないのではないか。

## (2) 準客体

もう一つ、バックとの比較でより興味深いのは、「準客体：quasi-objet」という概念である。バックは「準主体（擬似主体）：Quasi-Subjekt」という用語によって、再帰的近代に求められる新たな人間観を提示しているが、ラトゥールのほうは「準客体」を強調している。

この準客体という概念は、M・セールの〈準客体／準主体〉をラトゥールが援用して立てた概念であるが、ここでセールの学説の詳細に関わることは控え、ラトゥールが何を主張したいのを見ておきたい—準客体についての、セールに依拠した理論的考察は、本稿に続いて刊行される論文において検討する予定である。

バックの準主体の場合には、それまで蓄積されてきた近代的な自我論・自己論に対して、再帰的近代における主体の捉え方として、“分割された”、“自己編集する”フレキシブルな主体観が提示されている。ただ、こういう意味での準主体が現実に出現しているかどうかについては、ラトゥールは懐疑的である。

これに対してラトゥールが重視するのは客体の準客体化である。客体は、近代人が固定化した〈主体／客体〉二分法の一方にある訳ではなく、人間も非人間も、様々な要素が相互に関係し合って形成するハイブリッドなものであり、ネットワークの中にある。そのような協働のプロセスにおいて、客体は単なる「モノ」ではなく、主体と客体の両要素を内包した存在となる。これをセールに倣って準客体と呼んだのである<sup>(4)</sup>。

- (4) セールの「準客体」（準客体、準対象）について簡単な例を一つあげておく。ボールを使ったゲームにおいては、ボールというモノ（客体）がプレイヤー間でパスされることによって、ボールを中心としてゲームが展開する。そこでは、ボールは単なる客体には留まらない準客体となる。ボールという「この準客体は客体ではない。にもかかわらず、それは客体のひとつである。…それはまた、準主体である」（Serres, 1980, p.403）。

「モノ」に改めて注目する動きは、A・アパデュライなどの影響もあって、人類学や社会科学領域でも広まりつつある。アパデュライの主張は「商品（commodities）は人間と同じように社会的な生活（social lives）を持っている」（Appadurai, 1986, p.3）というものである。編著の題目にもあるような「モノの社会生活」という視点を導入し、社会的交換の中で商品が固有の価値を獲得してゆく過程に注目している。

アパデュライはモノの流通とそれを巡る社会関係において、モノが商品化するプロセスに焦点を置いているが、ラトゥールにおいては、モノの準客体的あり方、言い換えれば擬似“主体”的なあり方について、アパデュライよりも、もう一步踏み込んだ議論に進もうとしているように見える（理論的にそれが成功しているかどうかは別としても）。

そのような意味でのモノの準客体的・準主体的あり方は、社会学史的にはM・モースの贈与論に繋がる発想である。先に指摘したタルドの「モナロロジー」だけではなく、モノの社会的意味

については、モースの古典的業績と通底するところがあって興味深い。

モースの『贈与論』(1923-24)は、アルカイックな社会における贈与の社会的意味を探ろうとした研究であり、モース以降も、C・レヴィストロースやM・サーリンズ、M・ゴドリエに継承され、近年になって再び近代資本主義経済批判の文脈で、A・カイエやM・エナフによって再評価されている。そこでの『贈与論』の社会批判的意味についてはここでの言及は控え<sup>(5)</sup>、『贈与論』における「モノ」の探究がANTの関心と共通の地盤に立つものであることを示しておくたい。

- (5) 近代資本主義経済に対する批判として、『贈与論』に範をとった贈与経済や“互惠性”に依拠しようとする理論家は多いが、そこには「モースの神話」があり、互惠性への心情的思い入れが見られるように思われる。『贈与論』の理論的意義と可能性については、〔三上、2018〕で詳しく検討しているので、そちらを参照。

贈与の道德に人類社会の「岩盤」を見出したモースの意図とは別に、『贈与論』は、モノを介した社会関係の形成という点で興味深い理論的素材である。ANTはモノにも人間と同様の主体性を認めており、それが準客体という概念に現れているのであるが、これはモースにおいて贈与物が占めていた社会的位置と類似している。

アルカイックな社会において、各氏族・親族は贈与物のやりとりを媒介として各々の社会的位置を相対的に規定しているのであって、その際に重要なのは、贈与されるモノが贈与者と被贈与者の間を行き交いするプロセスである。

それらのモノには「ハウ」(hau)や「mana」(mana)と呼ばれる、モノの霊力が備わっていたりする。「ハウは、生まれた所、森とクランの聖地、元の所有者の所へ戻りたがるのである」(Mauss, op.cit.p.81)。アルカイックな社会においては「モノの循環が、人や権利の循環と同一なのである」(ibid.,p.171)。

そのような呪術的效果はさて置いても、当事者達の間では、あたかも贈与物に意思があるかのように意識されている。当事者達は、やりとりされるモノとの関係において各々の社会的位置関係を見定めているのであり、この独特の贈与システムにおいて、モノは人間と類似したアクターとして登場する。それゆえにこそ、「ハウ」や「mana」といった、モノの意思のようなものが感じられるのである。

だがモースのこの視点は、叔父デュルケームの“社会学的方法の規準”においては焦点化されることはない。デュルケームの場合には、全く逆の視線が優勢である。むしろ社会的なものを“事実”(社会的事実: fait social)として捉え、社会的事実を「モノ(chose)のように」考察

することが社会学の方法的規準となった。

「社会的事実モノとして扱われねばならない」(Durkheim, 1895, p.xii)。制度・規範・統計データ等を、あたかもそこにモノとしてあるかのように分析の対象とするのがデュルケームの立場である。

アクターとしての人間を認めたいうえで、客観的社会現象をモノとして捉えるデュルケームの姿勢は、ラトールが指摘した“主観と客観の社会的二分法”と映っても仕方のない部分には確かにある。それに比べて、モースにはモノの主体性（モースはこういう表現を好まないが）とでも言うべき観点が存在していたのだが、この視点はずっと埋もれたままであったようである。ラトールがモノドロジーについて述べたのと同じく、モース的な「モノの論理」もまた、それが正しく理解されるためには21世紀を待たなければならなかったのかも知れない。

### (3) 主体、客体、近代

ANTやアパデュライのような形でモノの固有の社会的来歴や価値を取り上げる論理は、“近代的主体”批判の後に登場する社会理論が必然的に持つことになる理論特性であると言えよう。近代的な“人間主体”の概念が説得力を失ってゆく過程で、行為者主体以外の要素である「状況」や「モノ」の力が認識されてゆくのは、ある意味で当然の成り行きであろう。

もう少し穿った見方をするならば、ANTが主張するようなモノの（主体であると同時に客体でもあるという）擬似的な存在様式は、近代的な主体とは異なったあり方をしている、現代社会の（ベックの言い方を借りるなら）擬似主体的な個人のあり方に随伴する現象である。現代人は、近代社会が想定していたような、自律的に行為する目的志向的主体ではなく、（しばしばE・ゴフマンの理論に依拠して言及される）“状況主義的”人間である。この点をもう少し検討しておこう。

G・ジンメルの所説に拠るならば、主体と客体の区別は、それらのどちらか一方が先にある訳ではなく、客体をどう捉えるかということは、主体というものをどう見るかということに連動している。

ジンメルは「人間が自らを<私> (Ich) と呼ぶことと、このような<私>の外にある客観的存在物を認知することとは、明らかに同時に生成するものである」(Simmel, 1900, S.30) と述べ、「自我と客体とは我々の存在のすべての可能性領域において相関概念なのであり、両者は表象作用の根源的形式においてはまだ未分化であるが、そこから、一方が他方に対して分化してくる」(ebd.S.42f.) と明言している。

ここから以下のような一つの結論が引き出される。「主体性の構成という問題を社会的経験の変容と関連させて考えるということ、…ならびに、社会的現実が多様であって、様々に変容し、

かつ、断片的で偶然的に体験されるときには、いかなる統一的自己像も媒介されない」ということを学ばねばならない (Biesenbach, 1988, S.139)。

近代人が強固な主体性と自己同一性の意識を持ちえたということは、客観的現実が同程度に揺るぎないものとして捉えられていたということになろう。ポスト近代社会における「主体の死」、「個人の終焉」というテーマは、同時に、客観的なものの流動化・情報化にその基盤があり、近代社会において一定の位置づけを保持していた主体と客体は、共にその地位を曖昧なものにしつつある。そのような状況の中で、準主体と準客体という思考法が妥当性を持ち始めたということではないか。

ここでは、主体としての個人と、操作対象としてのモノとが対峙するのではなく、人とモノを含めた状況のあり方が、個人の振り舞いやモノの意味を決定している。そのような時代に適合した理論としてANTの方法論の意義を認めることはできる。

## 5 社会学批判とモナドロジー

### (1) ラトゥールとタルド

ANTの理論的特性とそれ以外の「ポストモダンの」、「ポスト・ポストモダンの」社会理論の共通性について検討してきたが、他の社会理論とは違う際立った独自性を表わしているのがモナドロジー的世界観である。ラトゥールのモナドロジーが理論的に完成度の高いものに近づくならば、ANTは更に一段高い理論的飛躍を遂げるのではないかと期待される。

ラトゥールは「ANTはエスノメソドロジーの直接の子孫であるが、……最近になって、ガブリエル・タルドの非嫡出孫であることを発見した」と言っている (Latour, 2003, p.40)。ANTがエスノメソドロジーの直接の子孫であるかどうかについての検討はここでは控えておきたいが、タルドのモナドロジーとの関わりについては、理論的観点から見て非常に面白い内容を含んでいる。

ラトゥールがタルド理論について集中的に論じているのは論文「〈社会的なもの〉の終焉—アクター・ネットワーク理論とガブリエル・タルド」(2008)においてである。G・ドゥールーズによるタルド“再発見”の流れを受けた、2000年前後からのいわゆる「タルド・ルネッサンス」の中で見出されたであろう新たな知見である。

ベックとの「社会」観の相違と、その根底にあるデュルケーム的社会概念への批判は、当然のことながら、社会学創成期の「デュルケーム＝タルド論争」に遡及してゆかざるを得ない。

まずは「モナドロジー」というものがどういう社会理論であるのかを確認しておきたい。「存在すること、それは差異化することである」(Tarde, 1895, p.72)。ライブニッツとタルドに由来

するモノド論とは、同一性と統一性に回収されることのない固有の差異的・個性的存在を重視し、そこに潜在的可能性を見る理論である。ドゥールーズは『差異と反復』の中で、自らが依拠する「差異」の概念と同質のものをタルドに見出そうとしていた (Deleuze, 1968, p.39, pp.104f, p.264)。

「モノドには、そこを通過して何かが出たり入ったりする窓はない」(Leibniz, 1840, p.144)。ライプニッツのよく知られた記述である。タルドはこれに修正を加えて、「モノドが開いていて、相互に浸透し合っていると考えることで」ライプニッツのモノドが抱えた神秘主義的な謎を解決できるとした (Tarde, 1895, p.56)。

タルドの「ネオ・モノドロロジー」においては、ライプニッツのような、予定調和を可能にする超越的審級は存在しない。タルドの社会観は模倣 (imitation) という契機からなるものである。デュルケームのように一種独特の創発特性を持った実在として「社会」を想定するのではなく、特定の個人の意識に生まれた新しいモデル (発明) が、模倣によって他の諸個人の意識において無限に反復されるという、意識間の相互作用の連鎖を社会と考えている。それゆえ、比喩的意味を超えたものとしての、実在としての「集合的自我」(moi collectif) の存在は認めがたいことになる (Tarde, op.cit., p.68)。

ラトゥールによれば、タルドの思想が最終的に理解されるためには21世紀を待たなければならなかった。「最も小さな実在 (entity) は、その差異と複雑性において、それらの集合体 (aggregate) よりもいつも豊かである。……微小なものはいつもまた、最も複雑なものだからである」とタルドに共感しつつ、「エージェンシーに影響作用と模倣作用を加えたものが、別の言葉でアクター・ネットワークと呼ばれてきたものに他ならない」(Latour, 2008, p.4) と言う。

それゆえタルドがデュルケームを批判して指摘したように、「突然そこに集合的自我が出現するなどということは認められない」。ラトゥールの社会観は細部に至るまでタルドのモノド的世界観に共感しているようである。社会が個々のモノドより上位にあつて、より複雑で秩序だったものであるという“社会学的”見方を否定し、「大きなもの、全体、巨大なものは、モノドより上位にあるのではない。それらはより単純でより標準化されたものに過ぎない」(ibid.,p.7) と、タルドへの全面的賛同を示している。

「小」が常に「大」より複雑であるという、タルドの「反転した還元論的思考」においては、「〈社会的なもの〉は、……狭苦しく標準化された結合の、ちっけなセットに過ぎない」(ibid.,p.10)。タルドが要素的行為の集積によって全体的類似性を説明したのに対して、デュルケームは (生物有機体には還元できない独特の) 有機体として社会を想定した。それだけでなく、社会法則とその法則によって動かされるエージェントとを区別するという「ひどい間違いを犯している」とデュルケームを批判し、タルドに賛同する。そして、タルドにおいてもANTにおいても、「ポイントは、社会という曖昧な概念に通ずる道を避けることである」(ibid.,p.12) と結論

づける。

## (2) 「社会」の学とモノドロジー

我々はここで、ラトゥールがタルドを援用して批判する社会学批判が、真に社会学批判と言えるのかどうかを検討せねばならない。確かに〈デュルケーム＝タルド〉論争というステレオタイプ化された問題設定があり、20世紀社会学の主脈が（単純に社会実在論というレッテルを貼るのにはゆき過ぎであるが）デュルケーム的な社会観によって先導されてきたことは間違いない。

しかしデュルケーム自体がそれほど単純ではないし、タルドのモノドロジー的世界観もきちんと語られているとは言い難い。デュルケームはタルドの「模倣」による説明を批判したが、それに替えて「拘束」(contrainte)によって社会現象を説明し切ろうとした訳ではない。そんな野心はなく、ただ「哲学的観点によって科学的結論を予見すべきではない」ということを言いたかったのだとデュルケームは補足している (Durkheim, 1895, p.xx)。

もう一度、デュルケームとタルドが置かれていた（時代的な）理論的位相というものを確認しておく必要がある。

大きな図式を描くとすると、社会現象の説明にあたって、デュルケームは“全体性”（全体が部分を包摂する）によって社会学を構想したが、タルドは固有の差異的存在であるモノドからの“成全性”（全体を構成する）として事態を捉えようとした。ここで、社会学の体系化を目指したデュルケームには、その後に繋がるための理論的道具立てがあったが、タルドのモノド論には社会科学としてのポキャブラリーが不足していたと言わざるを得ない。

結果として、デュルケーム的な結びつけの論理は、その後パーソンズに受け継がれ、個人が社会的共有価値を内面化し（デュルケームの伝統）、主意主義的に行為すること（ウェーバーの伝統）によって社会秩序が維持・再生産されるという、20世紀社会学の基本路線（パーソンズの総合）が設定された。

ただし、「道徳的個人主義」に立脚するとはいえ、社会の側からの全体化を図った（方法論的集団主義としての）デュルケームの場合には、社会の概念に過剰な負担が課されている。個人のパフォーマンスをも社会から説明しようとするために、社会は、本来それとは別のカテゴリーであるはずの個人をも説明するという、概念的苦境に立たされる。正にデュルケームが言うように、社会は個人とは異なる位相にあり、個人を超えた独自の社会性（創発特性）を持つのであるから。

反対にタルドの場合には、モノド（としての個人）の側に過剰な概念的負担が掛かっている。モノド同士の相互浸透をいくら重ねて行っても、デュルケームの意味での社会の創発特性に到達することはできない。外化されたコミュニケーションによって成り立つ、もともと個人意識とは異なったレベルにある社会を、それにもかかわらず個人意識の内部特性によって説明しようとするところに、タルドの理論的困難がある。

ルーマンが指摘したように「真正の社会学的伝統の成立は、個人か集団かのどちらか一方のみを選んだり、性急にいずれか一方を選択したりしないで、両者を区別しておくことにあった」（Luhmann, 1981, S.247）とするならば、デュルケームとタルドは、個人と社会を区別しつつも結びつけようとする、異なった二種類の試みであったとすることができる。

「社会の終焉」、「個人化の時代」と呼ばれる現代において、「個人」と「社会」という概念の今日的意味について、モノドロジーから再考することの意義はある。そこでのモノドは、言わばネットワークの起点であると同時に結節点であるような、多くの可能性を備えた、情報ネットワークの個性的単位である。ネットワークに接続されたパソコンに向かう個人のイメージがそれに近い。「私には、インターネットがタルド的テクノロジーであるように思える」（Latour, 2008, p.11）。

ドゥールーズもラトゥールも気づいているように、モノドロジーは情報社会に親和的な理論装置である。模倣と伝播によるネットワーク形成という点から見れば、〈デュルケーム＝パーソンズ〉モデルよりも時代適合的に見える。そこにモノドロジーの可能性があるのだが、しかし、完全に「社会」を消去してしまうことはできない。

ベックのように、近代国民国家をイメージした「社会のコンテナ理論」（社会という概念に何もかも詰め込んでしまう）を批判し、柔軟でフレキシブルな社会の概念に立つのも中途半端であるが、だからと言って、ラトゥールに全面的に賛同する訳にはゆかない。なぜならば、個々人の意識に生起する心的活動と、個々人のコミュニケーションによって成立する相互作用のネットワークや組織を、両者が同じものとして扱うのは困難だからである。

近年の社会学が目するものは、個々人の意識が別々であるにもかかわらず、そこにコミュニケーションのネットワークが存在することである。私を感じ考えていることと、あなたが感じ考えていることが同じであるなどは、もはや想定しがたい状況があり、そこにパーソンズの「共有価値」の限界と、情報化された「個人化社会」（Z・バウマン）の実相がある。

### （3）モノドロジーを語り直す—「モノド」と「社会」のために—

タルドとデュルケームについては、その理論的対照性と同時に、相補的可能性についても論じられてきた。ソシユールの意味での「ラング」を重視するか「パロール」を問題とするかの違いはあっても、両者はそれぞれに「メディア領域におけるシンボル・システムの側面とコミュニケーション・プロセスの側面」を強調したのであり、世界を眺める相補的視点だとも言える（大野、2008、14-15頁）。

両理論の相補性については夙に指摘されてきたが、これまでの既存の社会学的ポキャブラリーで両者を繋ぐのは難しかったと言えるだろう。ANTの場合にはタルドとデュルケームを繋ぐことは初めから求めていないが、タルドとANTのどちらにも、説明のための十分な理論的装置が

存在するようには思えない。

タルドの視点を生かそうとするラトゥールであるが、残念ながら、モノドロジーを社会理論として位置づけるための適切な社会的ボキャブラリーがANTにはまだ不足しているように思われる。

そこで、モノドロジーを社会的ボキャブラリーによって補足するための試論的考察として、ルーマンのシステム理論とタルドのモノドロジーを出合わせて見たい。タルドのモノドロジーがルーマンのシステム理論と一定の親和性を持つことを示し、タルドに不足していた社会的ボキャブラリーをシステム理論によって補い、新たに語り直すという試みに手を染めて見たい。

デュルケーム的社会観に批判的であること、社会的なものをコミュニケーションのネットワークとして捉えること、情報論的・意味論的には「小」が「大」よりも複雑であること等々、ルーマンとタルドには少なからざる類似点がある。

ここに言う、「小」が「大」より複雑である（「大」は「小」を単純化したもの）という観点は、ルーマンとの共通性あるいは微妙な差という点で、興味深いものがある。ラトゥールは「文法」についてのタルドの記述を引用して次のように言っている。文法は話者達の発話行為が単純化され定型化された結果であるが、そのような固定化は、人々の精神をいっそう多様化することにも貢献する。つまり、文法という「大」は話者の話法という「小」に含まれる要素を単純化したものであり、話者達に更なる差異化を促進するための道具に過ぎない。「大は小の一つの要素が単純化されたものに過ぎない」(Latour, 2008,p.9) のである。

このタルド＝ラトゥールの“複雑性”についての考え方は、よく知られたルーマンの「複雑性の縮減」(Reduktion der Komplexität)を連想させる。多様な現実の複雑性を縮減することによって、社会関係の制度化やシステム化が可能になっているというのがルーマンの観点である。タルドのように「小」を過大評価するものではないが、制度化とシステム化によって達成された複雑性の縮減は、決して「小」を抹消するものではなく、逆に、「小」の複雑性を保存しつつ、「大」状況の手続き的簡明性を達成している。つまり、「小」と「大」は各々の自律性と差異性を維持しつつ併存しているという理論モデルである<sup>(6)</sup>。

(6) モノドロジーをルーマン的システム論によって語り直すことの理論的意味については、既に検討したことがある。ここで紙幅が大幅に拡大することは避けたいので、詳しくは〔三上、2010a〕を参照。

もっとも、意識システムと社会システムの基本的相違を認識するルーマンのシステム理論は、あくまでも社会システムの理論が中心であって、個人の意識システムについての固有の理論が十分に提供されている訳ではない。「個人化する社会」の「個人」を社会との関係で正しく位置づけ直すには、ルーマン的意味での〈社会システムと意識システム〉の峻別が必要であるが、ルーマンでは意識システムのモノダ的特性は十分には語られていないので、一定の保留は必要である。

ルーマンは（モノダ論をドゥールーズと重ねているがゆえに）モノダ論に対して批判的であるように見えるが、ライブニツツ＝タルド的モノダを、ルーマン系の用語を用いて表現するならば、モノダは＜自己言及的に閉じつつ開いた、自己産出（オートポイエシス）を遂行する意識システム＞と言い換えることが可能である。以下にそのことを示したい。

ルーマンは、コミュニケーションを要素として成り立つ「社会システム」と、個人の内的な思考・意欲などによって成り立つ「意識システム」（心的システム：Psychische Systeme）とを峻別している。

モノダ論をシステム理論的用語系で説明し直すならば、個人の意識システムも社会システムも、共に意味処理の主体であり、原理的にはモノダも社会も共に意味処理主体としての、自己言及的に閉じた意味システムと考えられる—そこに、両者を共にモノダ論で論じきってしまおうという、タルド的な概念の拡張が起こったと言えるかも知れない。

タルド以後の社会学の理論的発展とボキャブラリーの充実という点から見れば、タルドの場合には、共に意味処理システムである意識システムと社会システムが、それぞれに異なった要素を異なった仕方で処理するシステムであることが、十分に見通されていなかったのではないかと想像される。

デュルケームは、分業が生み出す連帯は「各人が固有の活動領域を持ち、したがって人格を持ち」、個人的人格が集合的人格に吸収されつくされていないときのみ可能となる（Durkheim, 1893, p.101）と言っていた。そしてルーマンは、「個人」という言葉は、意識システムがそれ自身において意味的に閉じた一つの個体的システムであることを指しており、同時に「特殊近代的な自己記述」としてある（Luhmann, 1984, Kap.7など）と付け加える。

デュルケームは「社会」の概念で世界を埋め尽くそうとした訳ではないし、ルーマンは「個人」をモノダ的に捉えているようにも見える。この〈社会と個人〉という二つの概念を、（それは間違いなく近代社会の産物であるが）単純に切り離したり結びつけたりしないことが社会学の課題であり続けてきたはずである。「社会」の概念についての社会学史的検討と現代的位相については [三上, 2010b] で考察しているのでここでは省くが、社会学において実際に行われていた学問的営為は、ANTが目指すものとそれほどかけ離れていたのだろうか。

モノダを個人の意識システムとして捉え直し、社会システムとは異なった独自の自律的システムとみなすことは、個人と社会を共に「閉じつつ開いた」固有のシステムとして同等の資格で捉え直すことである。そして両者が相互に独立した別々のシステムであるからこそ、様々なメディアを用いて結びつけられるのだ、という観点への移行を促す<sup>(7)</sup>。個人の意識システムは、個別的存在であると同時に開放的であり、社会システムと区別されてはいるが、各種メディアによって他者と社会とも接続しコミュニケーションのネットワークを形成している。

- (7) 個人の意識システムも社会システムも、意味的に閉じていなければ、それとして自律的に存在することはできない＝他の存在者との境界維持。しかし、そうであるからこそ、何らかのメディア（言語、貨幣、愛、権力等）を用いて、自身ではない他者（他のシステム）とのコミュニケーションを図ろうとする。その帰結がコミュニケーションのネットワークである。

現代の社会学は、ラトゥールが考えているよりもずっと「社会」の概念に対してフレキシブルであるし、社会をコミュニケーションのネットワークと捉え、同時に、モノドロジーの発想をも含みこんだものとなりつつあるように見える。

もちろん、ルーマンのシステム理論でモノドロジーが説明されてしまう訳ではないが、理論的対話の可能性として、単に社会学を批判するだけでなく、同時代の社会理論として、新たな展開を模索する共通の土壌にも目を向けるべきであろう。

## まとめ

以上、本稿ではANTの理論的特性を社会学サイドから再検討してきた。社会学理論から見てANTがどのように位置づけられるのかを明確にし、また、ANTがよりいっそうの理論的發展を遂げるためにも、必要な作業である。

論考の長大化と冗長性を避けるために、詳細に検討できなかった部分も残るが、「社会」の学としての社会学から見て、ANTがどのように解釈できるのかを、古典理論と現代社会学の双方から確認しようとした。

ANTの持つタルド由来のモノドロジー的観点と、モノの準客体的な把握は、「ポストモダン」以降の新しい社会学理論の形成に向けて、参照すべき幾つかの論点を含んでいることが示せたと思う。

とは言え、モノドロジーの再考や、モノの準主体・準客体的あり方については、参照すべき先行研究が数多く存在し、とりわけ後者については、人類学などを中心にして、近年、数多くの研究が存在する。これらを踏まえた上で、モノの理論とモノドロジーのシステムという論点を更に追究してゆく必要があるが、それについては別稿を期したいと思う。

## 【引用文献】

欧語文献からの引用文は、全て筆者が原典から訳出したものであるが、必要に応じて、代表的翻訳文献も参照した。

Appadurai, A., 1986 : Introduction: Commodities and the politics of values, Appadurai, A., (ed.), *The social life of things*, Cambridge Univ. Press.

Beck, U./Giddens, A./Lash, S., 1994 : *Reflexive Modernization*, Polity Press. 松尾精文他訳、『再帰的近代化』、而立書房、1997年

Biesenbach, K.P., 1988: *Subjektivität ohne Substanz*, Peter Lang.

Deleuze, G., 1968: *Différence et répétition*, PUF. 財津 理訳、『差異と反復』、河出書房新社、1992年

- Durkheim, E., 1893: *De la division du travail social*, 10e éd., PUF, 1978. 田原音和訳、『社会分業論』、青木書店、1971年
- Durkheim, E. 1895: *Les Règles de la méthode sociologique*, 15e éd., 1963, PUF. 佐々木交賢訳、『社会学的方法の規準』、学文社、1979年
- Gabriel, M., 2013: *Warum es die Welt nicht gibt*. Ullstein. 清水一浩訳、『なぜ世界は存在しないのか』、講談社、2018年
- Latour, B., 1991: *Nous n'avons jamais été modernes, Essai d'anthropologie symétrique*, La Découverte.
- Latour, B., 1993: *We have never been modern*, Harvard Univ. Press. 川村久美子訳、『虚構の「近代」』、新評論、2008年：(1991年仏語版の英訳であるが、仏語版に比べて修正や加筆部分が多いので、本稿では別文献として扱う。邦訳書は英語版からのものである。)
- Latour, B., 1999: *Pandora's Hope. Essays on the Reality of Science Studies*, Harvard Univ. Press. 川勝・平川訳、『科学論の実在 パンドラの希望』、産業図書、2007年
- Latour, B., 2003: Is Re-modernization Occurring? *Theory, Culture & Society* 20 (2).
- Latour, B., 2005: *Reassembling the Social. An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford Univ. Press. 伊藤嘉高訳、『社会的なものを組み直す』、法政大学出版局、2019年
- Latour, B., 2008: Gabriel Tarde and the End of the Social, <http://www.bruno-latour.fr/articles/article/082.html>. 村澤真保呂訳、『「社会的なもの」の終焉—アクターネットワーク理論とガブリエル・タルド』、VOL 05、以文社、2011：(もともとは、Joyce, P., (ed.), *The Social in Question*, Routledge, 2002に収録された論文であるが、現在はWeb上で一般に公開されており、本稿でもそこから引用した。)
- Law, J., 1992: Note on the Theory of the Actor-Network : Ordering, Strategy and Heterogeneity, *Systems Practice*, 5.
- Leibniz, G.W., 1840: *La monadologie*, Delagrave, 1995. 清水富雄他訳、『ライブニッツ：モノドロジー 形而上学叙説』、中央公論社、2005年
- Luhmann, N., 1981: *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, Bd.2., Suhrkamp. 佐藤 勉訳、『社会システム理論の視座』、木鐸社、1985年
- Luhmann, N., 1984: *Soziale Systeme*, Suhrkamp. 佐藤 勉監訳、『社会システム理論』(上)(下)、恒星社厚生閣、1993、1995年
- Man, M., 1986: *The Source of Social Power, vol.1*, Cambridge Univ., Press. 森本・君塚訳、『ソーシャル・パワー：社会的な〈力〉の世界歴史1』、NTT出版、2002年
- Mauss, M., 1923-24 : *Essai sur le don*, PUF., 2012. 吉田・江川訳、『贈与論』、ちくま学芸文庫、2009年
- Rose, N., 1996: The Death of the Social?, *Economy and Society* 25 (3).
- Serres, M., 1980: *Le parasite*, Hachette Littératures, 1997. 及川・米山訳、『パラジット』、法制大学出版局、1987年
- Simmel, G., 1900: *Philosophie des Geldes*. Gesamtausgabe. Bd.16. Suhrkamp. 1989 居安 正他訳、『貨幣の哲学』、ジンメル著作集2、白水社、1994年
- Tarde, G., 1895: *Monadologie et sociologie*, Institut Synthélabo, 1999. 『社会法則／モノド論と社会学』、村澤・信友訳、河出書房新社、2008年
- 大野道邦、2008：「デュルケームとタルドの対話—メディア論を巡って—」、『日仏社会学年報』、第18号
- 松本三和夫、2009：『テクノサイエンス・リスクと社会学』、東京大学出版会
- 三上剛史、2010a：「モノドロジーと社会学—意識システムとモノド—」、『国際文化学研究』、第34号
- 三上剛史、2010b：『社会の思考—リスクと監視と個人化—』、学文社
- 三上剛史、2018：「「贈る」行為の両義性—『贈与論』再考：モースからジンメルそしてルーマンを経由して—」、追手門学院大学社会学部紀要、第12号

